

# うたとかたりの対人援助学

## 第4回 『遠野物語』第99話と「悲哀の仕事」

鵜野 祐介

### 大平悦子さんのこと

今年(2017)11月5日、遠野市おおいらの大平悦子さんのご自宅にお邪魔し、民話の語りを聞かせていただいた。

大平さんは1954年遠野に生まれ、高校卒業後、東京の大学に進学。卒業後、神奈川県内の公立小学校教諭。在職中から、小澤俊夫主宰の「昔ばなし大学」に参加して語り手としての研鑽を積む。定年を待たずに退職し、語り部としての活動を本格的に始める。首都圏と遠野を中心に、全国各地さらには海外でも公演を行っている。『大平悦子の遠野ものがたり』(DVDブック、日本民話の会編、悠書館2014)を刊行。

晩秋の日の午後、移築した萱葺き屋根の古民家の囲炉裏端で、燃える薪のはぜる音や薪から立ち上る煙の中、大平さんの語りを聴いた。

今回、『遠野物語』(1910)第99話をプログラムに入れていただくよう事前をお願いしていた。これは明治29年の三陸大津波にちなんだ「実話」で、2011年東日本大震災の後、一躍注目されることになった話である。

「むがーす、あつたずもな……」。大平さんの語りをそのまま掲載したいところだが、紙幅の都合でかなわないため、後藤総一郎監修、佐藤誠輔訳『口語訳 遠野物語』(河出書房新社1992年)から引用させていただく。

### 『遠野物語』第99話

土淵村つちぶちむらの助役北川清あざひいしという人の家は字火石にあります。代々山伏で、祖父は正福院しょうふくいんといい、学者で著作も多く、村のために尽した人です。

その清の弟で福二という人は、海岸の田の浜むらへ髻に行きましたが、先年(明治29年)の大津波(注1)にあい、妻と子どもを失いました。その後は生き残った二人の子どもとともに、元の屋敷あとに小屋を作り、一年ばかりそこにおりました。

それは夏のはじめ、月夜の晩のことでした。福二は便所に起きましたが、便所は遠く離れたところにあり、そこまで行く道は、波の打ちよせるなざさです。霧の一面に広がる夜でしたが、その霧の中から男女の二人連つれが近づいて来ました。見ると女は、たしかに亡くなった自分の妻です。福二は思わずその跡をつけてはるばる船越村ふなこしへ行く岬の、洞穴のあたりまで追いました。

そこで妻の名を呼びますと、女はふり返ってにこっと笑いました。男のほうを見ますと、これも同じ里の者で、津波の難にあって死んだ人です。なんでも自分が髻に入る前、互いに深く心を通わせていたと聞いていた男です。「いまは、この人と夫婦になっています」と、女が言うものですから、「子どもは、かわいくないのか」と言いますと、女は少し顔色を変え、泣きだしてし

まいりました。

死んだ人と話をしてるようには思えず、現実のようで悲しく、情けなくなりました。うなだれて足元に目を落としているうちに、その男女はふたたび足早にそこから立ちのき、小浦<sup>おうら</sup>へ行く道の山陰をめぐる、見えなくなってしまうしました。少し追いかけてもみましたが、(相手は死んだ人なのに)と気づいてやめました。それでも夜明けまで、道に立っているいろいろと考え、朝になってからやっと小屋に帰りました。福二はその後もしばらくの間、悩み苦しんだということです。

(注1. 明治29年6月15日(旧暦5月5日)夜8時ごろ、岩手県を中心とする三陸沿岸を襲った大津波のこと。波高は、38.2メートルを記録し、溺死者は2万2千人といわれ、最大級の津波だった。特に大槌町では、日清戦争の凱旋記念花火大会が海岸で行なわれていて、一瞬のうちに全滅という惨状だったという。同書178頁)

#### 大平さんの解釈

大平さんはこの話を遠野の言葉でしみじみと語られた後、ご自身の取材などによって得た興味深いエピソードをいくつか話された。福二の妻子は実際には行方不明のままであったこと、今回の津波でも福二の子孫の方が奥様を失くされたこと、『遠野物語』の著者柳田国男に語って聞かせた佐々木喜善と、福二は親戚筋にあたること。その上で次のように話された。

「震災から半年ぐらい経ってこの話を語るようになったのですが、最初のうちは、愛する妻が死後の世界で昔の恋人と一緒にいることを知った福二のことを可哀想だと思っていました。

でも、今回の震災の後、行方不明になった家族の死亡届を出せないでいたら何年か経って夢に現れたとか、イタコ(巫女)に死者の霊を降

ろす口寄せをしてもらったら『おれは今、海の底にいる。おだやかな気持ちでいるから、もう探さなくていいよ』と言うのを聞いて、ようやく気持ちの区切りがついたとかいった話を聞いているうちに、もしかしたら福二も同じだったんじゃないかと思うようになりました。

忘れがたい妻ではあるけれども、やっぱりどっかで気持ちに区切りをつけて、前に向いて進まなくてはいけない。そういう気持ちがこの幻を見せたのではないか。それから、もしかしたら奥様の方も、『もうあなた、頑張って前を向いて進みなさい』って、励ましの気持ちで、姿を見せてくれたんじゃないかなあ、なんて思ったりしました」。

#### 対象喪失と悲哀の仕事

愛着あるいは依存する対象を喪失することや、それによって引き起こされる、病的なものも含むさまざまな心理のことを、精神分析学では「対象喪失(object loss)」と呼び、G.フロイトの「悲哀とメランコリー」(1917)以来、研究が進められてきた。日本でも小此木啓吾『対象喪失』(中公新書1979)、森省二『子どもの悲しみの世界 対象喪失という病理』(ちくま学芸文庫1995)、野田正彰『喪の途上にて 大事故遺族の悲哀の研究』(岩波現代文庫2014)といった優れた研究成果が発表されている。

小此木(1979)によれば、対象を失った場合、われわれは大別して2つの心的な反応方向を迎える。「一つは、対象を失ったことが、一つの心的なストレスとなっておこる急性の情緒危機(emotional crisis)である。もう一つは、対象を失ったことに対する持続的な悲哀(mourning)の心理過程である。(中略)この悲哀の心理過程は、半年から一年ぐらいつづくのが常であるが、そのあいだに人びとは、失った対象に対す

る思慕の情、くやみ、うらみ、自責、仇討ち心理をはじめ、その対象とのかかわりの中で抱いていた、さまざまな愛と憎しみのアンビバレンスを再体験する。そしてこの心の中での悲哀の心理過程を通して、その対象とのかかわりを整理し、心の中でその対象像をやすらかで穏やかな存在として受け入れるようになっていく。(中略)フロイトはこのような悲哀の営みを『悲哀の仕事』(mourning work)と呼んだ』(pp.44-46)。

#### 悲哀の仕事としての「物語ること」

福二が実際に妻のまぼろしを見たのかどうかは分からない。ただ、福二はこの「出来事」を、誰かに語らずにはいられなかったのではないか。そして、物語ることで行方不明の妻に対する気持ちに区切りをつけ、前に進んでいこうとしたのではないだろうか。つまり、福二にとって物語ることは「悲哀の仕事」であったと考えられる。

この時、佐々木喜善は福二の「物語」の大事な聴き手の一人であったに相違ない。喜善は福二の姉子工の孫にあたり、福二よりも26歳年下で、大津波の年には10歳だった。いつ頃この話を聞いたかは不明だが、泉鏡花に憧れる文学青年の喜善は、福二の話にじっくりと耳を傾け、これを脳裏に刻みつけたことだろう。喜善は後に自著「縁女綺聞」(1934)にもこの話を紹介している(ここでは、大津波が起こったその年の7月の新盆の夜の出来事とされ、「この女房の屍は遂に見付からなかった」と記されている)。

2011年の東日本大震災の後、みやぎ民話の会などが中心となって、被災者が震災体験を語る場が積極的に設けられてきた(第七回みやぎ民話の学校実行委員会編『2011・3・11大地震大津波を語り継ぐために』みやぎ民話の会2012、他)。また、被災した子どもや若者の語り

の活動も行われてきた(佐藤敏郎監修『16歳の語り部』ポプラ社2016)。さらに、被災地での不思議な体験の語りを書き留めた記録も出版されている(奥野修司『魂でもいいから、そばにいて 3・11後の霊体験を聞く』新潮社2017)。

こうした「物語る」という営みが、語り手にとっての「悲哀の仕事」として機能していることは疑いない。と同時に、その物語を聴く者にとっても、被災者への同情や憐みを超えた「悲哀の仕事」の疑似体験、「我が事」として痛みや疼きと共に受けとめるという体験が、「語りの場」においてなされているのではなかろうか。

#### 悲哀の仕事としての「表現すること」

11月下旬、新美南吉の童話「でんでんむしのかなしみ」を絵本化(新樹社2012)された鈴木<sup>やすまさ</sup>靖将さんの講演を聴く機会があった。

鈴木さんはこの作品の制作を進めていた頃、20代の娘さんを突然亡くされた。鈴木さんご夫妻が亡き骸を前に通夜を過ごしていた時、かまきりがご遺体の上に止まり、こちらをじっと見ているのに気づいたという。まるで娘さんのたましいがかまきりにのり移って、自分を見守っているかのようなだったと。「ああ、あのでんでんむしは自分だ。殻いっぱいにつまった悲しみを背負って、それでも生きていかなければ」。

鈴木さんは絵本化にあたって、ほとんどすべての画面にでんでんむしを見守るかまきりの姿を描いた。もちろん新美南吉の原作には、かまきりは登場しない。けれども、かまきりを描き、このかまきりに見守られているでんでんむしを描くことで、鈴木さんの「悲哀の仕事」は行われたのだ。

当日買い求めた絵本に、鈴木さんはこう記して下さった。「かなしみが心を豊かにしてくれますように」。